

作業経験をした上での日案 (指導計画案) 指導の考察

－保育内容総論での授業実践を基に－

花 田 嘉 雄 幼児教育科

(2017年10月24日受理)

〔 要 約 〕

アンケート調査の結果、作業経験を基に日案を書いた方が、作業経験がない状態で書くよりも、活動のポイントが体験的に分かるため、活動に対するイメージがつきやすくなり、日案を書きやすくなることが分かったが、その効果は限定的であった。学生に子どものおよその姿を把握させること、また、学生が援助と留意点を考えやすくするための工夫等が必要であり、今後の課題である。

I. はじめに

本学では、保育実習指導の授業の中で5コマ分の日案 (指導計画案) 指導を行っている。1コマ目は、教育実習Ⅰ後に本学附属幼稚園の主幹教諭が模擬保育を行い、それを見ながら学生が日案の穴埋めをする形で実施している。この時に、日案の意義や書き方についても主幹教諭から説明してもらっている。2～4コマ目の3コマ分は、1年生の年度末に行い、実習委員会や担任が協力して日案指導を行っている。学生は、ここで初めて白紙の状態から日案を完成させる作業をすることになる。日案の意義や書き方の要点を確認した上で日案を書くように指導しているが、日案の形式に慣れることを目的としているため、日案の参考例を参考に書き写す作業が中心となっている。5コマ目は保育実習Ⅱ直前の時期に再度附属幼稚園の主幹教諭が講師として来学し、1回目とは違う内容の模擬保育を行った上での日案指導を行っている。学生は、模擬保育を見ながら活動の流れ、環境構成、援助と留意点を書き込むが、半分くらいの学生が自分なりの留意点を最後まで書ききれない状況である。この時は、最後に主幹教諭から子どもの姿やねらいを基にした援助と留意点についての解説があり、学生にとって非常に分かりやすい内容となっている。しかし、学生自身がねらいを立て、活動内容を決め、どのように展開し、どのような援助と留意点が必要か等を想定しながら日案を作成するレベルには至っていない。特に、1年生の年度末に行う3コマ分の指導では、日案の形式を整える指導で終わっている。それは、子どもの姿をイメージし、ねらいを立てて内容を考える以前の問題として、日案を書くということ自体が大きなハードルになっている学生が増加する傾向にあるからである。特に、自

分で案を考えることや文章化することに苦手意識を持っている学生が多い。自分で案を考える能力には個人差があるため、日案の書き方を形式化して、基本的な保育の流れを文章化して書くことに慣れることからの指導になっている。そして、その形式を書くことで学生が満足しているのが現状であり、5コマ分の実習指導の成果となっている。従って、実習直前に各自が立てる日案についても、自分が考えた日案でありながら、実際に保育実践する際のイメージができていない学生が多い。

平成26年度専門委員会課題研究報告書¹⁾によると、非担当教員が自分の授業展開において保育実習を意識しているかどうかという設問に対して、保育実習を意識した授業展開を「行っている」との回答が51.7%、「多少意識して行っている」との回答が39.9%であり、合わせて9割の教員が保育実習を意識した授業展開を意識して行っていることが分かる。これは、保育実習に関連した授業を行うことにより、学生が高い意識で授業に臨むようになったり、授業内容をイメージしやすくなったりする等のメリットがあるのと同時に、実習指導の授業時間だけでは指導内容が追い付かないという理由も考えられる。

本学でも、保育内容研究「表現」や筆者が担当する保育内容総論など、いくつかの授業で保育実習を意識した授業展開を行っている。保育内容総論は、本学では2年次前期に開講しており、6月には2年次学生が保育実習Ⅱを実施するため、前半は保育実習Ⅱを意識した授業内容になっている。保育内容研究「表現」も2年次前期に開講しているが、そちらの授業では、表現的な活動に入る前の導入、即ち子どもをどのように表現活動の世界の中に引き込むかに重点を置いている。

そこで、保育内容総論では、日案指導に重点を置き、特に、作業経験を踏まえた日案指導を行っている。筆者の専門分野が造形分野であることもあり、制作活動や造形遊びに偏っているが、5コマ分を日案指導のために確保し、次のように授業を進めている。

3コマ分を保育内容の研究として授業を実施している。1コマ目が牛乳パックと輪ゴムを使った2種類の跳ねるおもちゃづくり、2コマ目がその他の牛乳パックを使った活動の中から学生が自由に選んだ保育教材づくり、3コマ目が小麦粉粘土遊びである。それぞれの授業では、子どもにとっての難易度や、実際に保育実践するとしたらどのような活動になるかを、授業後の振り返り用のワークシートによって学生に想定させるようにしている。例えば小麦粉粘土遊びについては、授業では粉の状態から粘土を作り、着色し、遊びへと展開しているが、自分が実際に保育教材として活用するとしたら、何歳児対象でどの段階で子どもに渡し、ねらいや活動内容はどのようにするかを想定して書かせるようにしている。その後、授業で行った3つの活動内容から1つを選び、その活動部分の日案を1コマ分の授業時間内に書くという日案指導を行っている。ただし、授業の前半30分は日案を書く上での抑えるべきポイントの確認を行っているため、学生が日案を書く時間は実質60分程度となる。保育実習Ⅱの1、2週間前にこの日案指導を行うように授業を組んでおり、大半の学生が実習園とのオリエンテーションを済ませている時期であるため、対象児は実際に責任実習をする予定の年齢の子どもとし、保育時間は約40分の活動として書くように条件付けしている。もし実習園とのオリエンテーション時に保育時間が決まっているようならば、実際に行う時間に合わせるようにしている。因みに、1年次後半に行った保育実習保育所と保育実習Ⅱは同じ保育所で実習するため、保育所の様子や子どもの様子はある程度把握されている状態である。書いた日案は授業後に回収し、添削して次の授業時に返却している。その残りの1コマは、添削された日案を参考にしながら、学生自身が実際に責任実習で行う予定の日案を書く時間にしている。

このように、学生自身が一回作業経験したことを基に日案を書く練習をすることによって、学生の中に日案を書く際の活動のイメージがつきやすくなると考えている。例えば、時間配分について、学生が10分かけた作業は子どもの場合どうなるだろうか、学生にとって難しいと感じた作業は子どもにとっては更に難しい作業になるのではないか、どんな作業が楽しいと感じ

るか、活動を楽しむためにどんな工夫ができそうか等の想定がしやすくなると思われる。しかし、学生にとってどれだけの効果があるかは、まだ検証していない。そこで、学生対象にアンケート調査を行い、作業経験をした上での日案指導の効果や課題を検証した。

Ⅱ. 方法

1. 対象者

羽陽学園短期大学平成29年度2年次学生107名であり、必修科目である保育内容総論の履修者数であった。

2. 実施日、手続き

保育実習Ⅱ直前の保育内容総論の授業時間内にアンケート調査を実施、回収した。保育内容総論はクラスごとに開講しているため、実施日はクラスによって異なる。回収数の96枚（回収率89.7%）を分析の対象とした。

3. 調査内容

本調査では、1. 作業経験を基にした日案指導実施についての評価、2. 日案の量的完成度を調査する内容で実施し、1については評価の理由、2については日案を書く時に最も難しいと感じた点を記述してもらった。

実際の調査内容は次の通りである。

『日案指導に関するアンケート』

1. 今回、造形遊びの日案（指導案）を作成する練習として、事前に見本や試作をつくってから日案を作成してもらいました。このように、作業経験を基に日案を書く指導について、行った方が良いと思いますか？

下の①～③の中から選んで□にチェックを入れてください。

①行った方が良い。

②行う必要はない。

③どちらでもない。

1-2. ①にチェックをした方は、何故書きやすかったと思いますか？その理由を述べてください。

1-3. ②、③にチェックをした方は、その理由を述べてください。

2. 日案はどれくらい書けましたか？

下の①～④の中から選んで、□にチェックを入れてください。

- ①ほとんど書けなかった
- ②半分くらい書けた
- ③ほとんど書けた
- ④最後まで書けた

2-2. 日案を書く時に、最も難しかったことは何ですか？

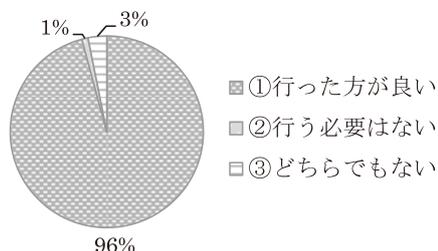
Ⅲ. 結果と考察

アンケート調査の結果は次の通りであった。

1. 作業経験を基にした日案指導実施についての評価

①行った方が良いと答えた学生が96%（92名）、②行う必要はないと答えた学生が1%（1名）、③どちらでもないと答えた学生が3%（3名）であり、大半の学生が、作業経験を基にした日案指導を行った方が良いと考えていることが分かった。

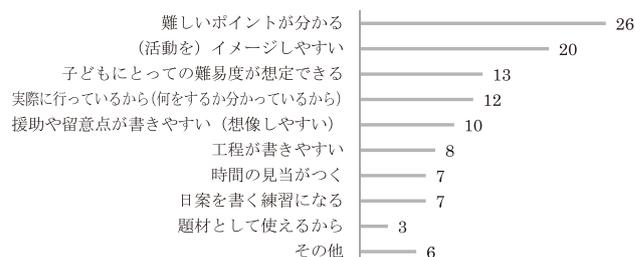
図1 作業経験を基にした日案指導実施についての評価



1-2. 1において①行った方が良いと答えた学生の理由についての自由記述の分類

行った方が良いと答えた学生は、92名全員がその理由を書いており、中には複数の理由を書いている学生もいた。理由として一番多かったのが、難しいポイントが分かるから（26件）であり、活動をイメージしやすいから（20件）が次いで多く、子どもにとっての難易度が想定できるから（13件）、実際に行っているから（何をするか分かっているから）（12件）、援助や留意点を書きやすいから（想像しやすい）（10件）、工程が書きやすいから（8件）、時間の見当がつくから（7件）、日案を書く練習になるから（7件）、題材として使えるから（3件）、その他（6件）と続いた。

図2 行った方が良いと答えた理由



以上の結果から、実際に自分で作業をしてから日案を書くのと、作業経験のないまま日案を書くよりも、こういった作業が難しいのかが体験的に分かり、また、どのような活動展開になるかというイメージがつきやすくなり、更には活動の流れや時間の見当がつくために、日案が書きやすくなったことが分かる。作業経験を基に日案を書いた方が良いと答えた学生については、ほぼ筆者の意図する通りの結果になったと言える。

1-3. 1において②行う必要はない、③どちらでもないと答えた学生の理由についての自由記述の分類

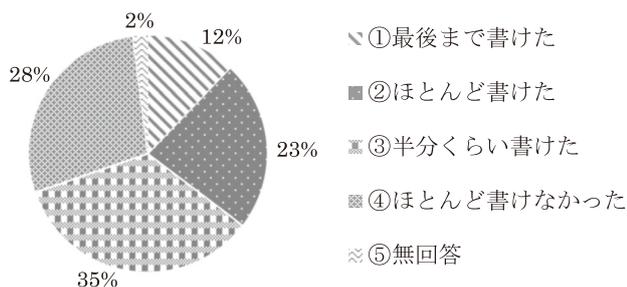
行う必要はないと答えた1名の学生は、その理由を書いていなかった。また、どちらでもないと答えた学生3名のうち、理由を書いた学生は2名であった。2名の理由は、それぞれ「事前に行っても行わなくても自分の書くペースに変わりはないから」、「物によると思う。すぐに行えるのならやってみる方が良いが、すぐに準備することができないものならとりあえず書いてからになると思ったから」という理由であった。前者の理由については、日案を書くという作業を終わらせることが目的となっていることが窺われる。後者の理由については、実際に自分が責任実習を行うことを想定した上で、ケースバイケースになるという判断に至ったことが窺われる。

2. 日案の量的完成度

③半分くらい書けたと回答した学生が34%と最も多く、次いで④ほとんど書けなかった学生が28%、②ほとんど書けた学生が23%、①最後まで書けた学生が12%、無回答が2%という結果であった。どのくらい書けたかについては学生の感覚的な判断によるものであるが、内容とねらいを設定し、導入から振り返りまでの活動の流れを書き終えるか、もしくは活動の流れはまだ書き終えていないが、導入部分の援助と留意点まで書き終えている状態を半分くらい書けた状態としている。その半分までいかなかった学生、即ちほとんど書けなかった学生は28%と3割近い数字である。ま

た、半分くらい書けた学生と合わせて、6割以上の学生が、日案を書くことに苦労していることが分かる。今回は、前述の通り学生が実際に作業した経験を基に、また活動内容も絞られた状態での日案作成であるため、活動の流れはほぼ把握しているはずである。それにも拘らず、3割近い学生がほとんど書けない状態で苦労しているのは何故なのか、その理由を次の日案を書く時に難しかったことについての自由記述で拾ってみた。

図3 日案の量的完成度

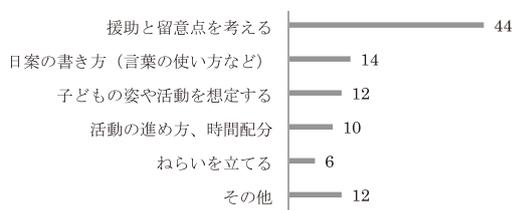


2-2. 日案を書く時に難しかったことについての自由記述の分類と考察

日案を書く時に難しかったことについての自由記述の内容は、日案の量的完成度による偏りがなかったため、一括で分類した結果、次の通りとなった。

日案を書く時に最も難しかったこととして、一番多かったのが、援助と留意点を考えること（44件）であり、半数近い学生が難しいと感じていることが分かる。次いで多かったのは、日案の書き方（言葉の使い方など）（14件）であり、子どもの姿や活動を想定すること（12件）、活動の進め方、時間配分（10件）、ねらいを立てること（6件）と続いた。

図4 日案を書く時に最も難しかったこと



援助と留意点については、漠然と「援助」や「留意点」と書いた学生が大半であったが、中には、「どんな言葉掛けや対応が必要か」、「子どもに分かりやすく説明する方法」、「年次に合わせて考えるのが難しかった」、「進み具合をある程度同じにするためにはどのようなことに気をつけるのか」などのように具体的に書いた学生もいた。これらの学生は、形式的に日案を書

くのではなく、自分で活動の様子をイメージしようとしながら日案を考えることができていることが窺われる。特に、子どもに対してどんな援助や留意点が必要かについて、ある程度想定しようとしながら日案を書いていることが窺われる。いずれにしても、約4割の学生が援助と留意点を考えることが最も難しかったと感じており、自分が実際に保育をする際にどのように子どもと関わればよいかを考えることは、まだ一度も責任実習を行ったことがない学生には難しいことであることが分かる。1-2において、援助や留意点が想像しやすくなったと答えたにもかかわらず援助と留意点を最も難しいことと答えた学生が数名いたことから、作業経験の効果は限定的であることが分かる。援助が必要なポイントや留意点であることには気づいたが、実際の子どもに対してどのような援助や留意点を述べたらよいかの難しい学生には、具体的な事例を紹介するなどして、どのような援助方法があるのか、学生が明確な見通しを持って考えられるようにする工夫も必要と思われる。また、作業経験によって活動の流れはイメージできたが、実際に子どもの前で保育するイメージがわからない学生に対しては、模擬保育や友達同士でシミュレーションをすることによって、どんな言葉掛けや関わり方をしたら良いのか等を試すことも効果的であると考えられる。

日案の書き方（言葉の使い方など）については、単純に文章を書くことが苦手な学生と、「頭ではイメージできたが、言葉にするのが難しい」のように、日案特有の書き方や言い回しに慣れていないために難しいと感じた学生とに二分されるが、いずれの学生も、枚数を重ね、日案特有の書き方に慣れることによって解決する問題と思われる。

子どもの姿や活動を想定することが最も難しいと感じた学生については、「子どもの姿をイメージすること」、「子どもの様子が分からないこと」、「何がどのくらいできるのか分からない」、「年齢に合わせた活動内容を考えること」のように、実践する対象児の姿や様子が分からないため書きづらかったことが分かる。本来、日案は子どもの姿を基にねらいや活動内容を考えるのが正しい順番であるため、その逆の順番で日案を書くことが難しいことは仕方のないことである。また、保育実習保育所の時に子どもの姿をよく観察していたとしても、半年ほど期間が開いているため、忘れてしまっている学生も多いと思われる。また、子どもの姿が以前の実習から変わっているはずであり、その後の姿をイメージすることは難しいであろう。年齢に合わせておおよその見当をつけることは可能であると思われるが、学生によっては、その見当が困難な場合もある

のではないかとと思われる。いずれにしても、本当の子どもの姿は、実習が始まって実際に子どもと関わることによって把握されることであるので、事前に日案練習をする際はおよその見当をするしかなく、子どものおよその姿をどのように学生にイメージさせるかが、日案指導上の課題の一つであると思われる。逆に、1-2において「子どもにとっての難易度が想定できるから」日案が書きやすくなった学生も1割ほどいることから、子どものおよその姿の見当をつけることのできる学生にとっては有意義な作業経験になったと思われる。

活動の進め方、時間配分については、「活動の進め方（手順）」、「流れ」、「時間配分」が最も難しいと感じた学生である。1-2において「工程が書きやすいから」、「時間の見当がつくから」日案が書きやすくなった学生と正反対の回答であり、一部の学生にとっては作業経験がほとんど意味のないものとなっていることが分かる。一部の学生の意識の低さも問題であるが、筆者の方も授業内で保育内容の研究をする際に、学生自身が自らの糧になるものと捉えて意欲的に、より高い意識で教材研究に取り組むことができるように授業を進める必要があり、今後改善しなければならない課題である。

ねらいを立てることについては、「子どもにどうなってほしいかよく考えながら活動を考えることが大切だから」という回答も見られた。ねらいを立てるためには子どもの姿を把握する必要があり、その把握ができていない状態でねらいを立てることが難しいことは当然である。ここでも、前述のように子どものおよその姿をどのように学生にイメージさせるかが課題と考えられる。

IV. まとめ

アンケート調査の結果により、作業経験を基に日案を書いた方が、作業経験がない状態で書くよりも、活動のポイントが体験的に分かるため、活動に対するイメージが付きやすくなり、書きやすくなることが分かった。しかし、活動内容が絞られており、流れがイメージできていても、6割以上の学生が、約1時間では半分くらいまでしか日案を完成させることができずに苦勞していることも分かった。特に、3割近い学生はほとんど書けていない状態であり、作業経験による効果は限定的と言える。その原因の一つとして、子どものおよその姿をイメージすることができない学生が多くなっていることが挙げられる。そのため、子どもの姿や活動を想定することが難しいだけでなく、ねら

いを立てたり子どもに合わせた援助や留意点を考えたりすることが難しいと感じる学生が多くなっている。普段から子どもと関わる機会を多くしたり、保育所保育指針や参考書、視覚教材を活用したりして、子どものおよその姿を学生がイメージしやすくなるようにする必要があると思われる。特に、文章読解が苦手な学生が多い本学の場合は、子どもと関わる経験を増やすことや、子どもの姿が分かるようなDVD等の視覚教材を活用することが効果的と考える。なぜならば、理論の壁にぶつかることによって学習意欲が低下してしまうと、その意欲を元に戻すための労力と時間が必要であり、2年間という短期間では本来の学びに結びつかなくなる可能性があるからである。直接体験して感じたことに理論を結びつける方が、理論を基に体験を結びつけるよりも直感的に理解しやすく、その後の学びにもスムーズにつながっていくと思われる。また、子どもと関わる経験が少ないために、文章化された子どもの姿がどのような姿を表しているのか理解できない学生も少なくないので、視覚教材等を活用するなどして、少しでも学生に子どものイメージを持たせ、文章の意味が伝わりやすくなるような工夫が必要になると思われる。次に、日案を書く上で最も難しかったこととして、4割ほどの学生が援助と留意点を考えることが難しかったと答えており、作業経験だけでなく、模擬保育をすることによって実践的なシミュレーションをしたり、参考として具体的な事例を紹介したりして、学生がどのような留意点が必要で、どのような援助ができるのかを想像しやすくなる必要もある。また、作業経験がほとんど意味のないものとなっている学生もおり、意識の低い学生には、学生自身の糧になることを意識させられるような授業内容の工夫が必要と考えられる。更に、言葉を文章化することや、日案特有の言い回しが難しいと感じる学生を少なくするためには、書く回数を増やして日案を書くことに慣れさせたり、絵画におけるラフスケッチのような気楽な案作りから始めたりするなどの工夫が必要であり、今後の課題として取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) 保育実習指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを中心に 全国保育士養成協議会専門委員会編著
全国保育士養成協議会 2015.8 専門委員会課題研究報告書／全国保育士養成協議会専門委員会編著
平成26年度 学生の自己成長感を保障する保育実習指導のあり方

SUMMARY

Yoshio HANADA:

Consideration of Teaching Guidance Plan after Working Experience
– Based on Lesson Practice in General Nursing Content Summary –

As a result of the questionnaire survey, it is easier for those who wrote the guidance plan after working experiences to know the points of the activities experientially rather than writing in the absence of work experience, so that the image of the activities will be more easily attached, it turned out to be easier to write, but its effect was limited.

It is necessary for students to grasp the approximate appearance of children and devise to make it easier for students to think about aid and points to be remembered, which is a future subject.

(Uyo Gakuen College)